

＜資 料＞

現代の古儀式派

安 村 仁 志

今より300年前にロシアの教会は分裂した。⁽¹⁾ 時の総主教ニコンの“改革”をめぐってそれに反対するグループは公教会より分離させられ、^{ラス}《分離派^{コーリニキ}》となった（彼らは“古きロシア”の伝統に基づく信仰生活を貫こうとしたわけで、古儀式派或いは旧信徒とも呼ばれるのは周知のことである）。ニコンの改革、分離派の主張（立場）とその後の歩み、ロシア史における意味等に関する問題については、多くの考察、研究、紹介がなされているが⁽²⁾、ここでは20世紀に入ってロシア革命を経た現代にラスコーリニキがどのような状態にあるかについて紹介してみたい。一般的にソ連の宗教事情（特に実態）について詳細、且つ正確に知ることは難しいが、ましてや分離派の現状など我が国ではほとんど知られていなかった。そのような状況の中で、1979年に В. Ф. Миловидов 《Современное старообрядчество》が出され、戦後行なわれた各種調査に基づく現状紹介がなされている。この書を中心に、ラスコーリニキの現状の一部を紹介するのが本稿の目的である。

(1) ラスコーリニキの側からすれば、1666年がラスコール300年とされるわけで、1666年がラスコール元年となる。それは1666年と67年に教会会議が開かれてニコンによる教会改革が認められ、それに反対するグループが公教会から分離させられたからである。その意味で1666年にラスコーリニキ（分離させられた者たち＝分離派）なる用語も生まれたのである。なおこの1666という数字はラスコーリニキの終末観における黙示的解釈とも関連づけられている。

(2) 参照 拙稿「ラスコール文献紹介」（日本ロシア文学会《ロシア語ロシア文学研究》12号）。現代の実態調査報告については本稿末尾に挙げる。

ソ連では、戦後の50年代末又は60年代初頭から宗教事情調査の一貫として社会学的調査が行なわれ、数多くの報告書が出されている（後に列挙する）。また、いわゆる сектантство の研究、実態報告についても多くの書がある⁽³⁾。反面ラスコーリニキは概念規定上正教会及び сектантство の両者から一定の距離があるためか⁽⁴⁾、正教関係、セクト関係の書では言及されることが少ないようである。従って情報は無神論及びそれを勧める立場からの、一つの社会現象の調査・研究といった性格が強いものとなっている。しかし、それらによっても現在なお分離派は生き続けていることがわかるのである。

分離派は、ツァーリ政府、教会からの弾圧を受け続けつつ、さまざまな手段を講じて生き延びてきたといえようが、ソビエト時代に入ってから公教会からの弾圧はとまったものの、他の宗教或いは宗教グループとともになお無神論教育という形での攻勢を受けているのである。他方、ソビエト内外で古きロシアを知るという学問的立場からの興味・関心は高まっている。

1. 分離派の分布状況

1. 北部地域

(3) Клибанов А. И. “История религиозного сектантства в России” М., 1965, “Религиозное сектантство и современность” М., 1969; Волков Н. Н. “Секта скопцов” Л., 1931; Дружинин В. “Духоборы” Л., 1930, “Молокане” Л., 1930; Малахова И. “Духовные христиане” М., 1970; Митрохин Л. И. “Баптизм и знание” М., 1971; Морозов И. “Молокане” М.-Л., 1931; Ярцев А. “Секта евангельских христиан” М., 1928; Белов А. В. “Секты, сектантство, сектанты” М., 1978, Коник В. В. “Иллюзии свидетелей Иеговы” М., 1981; Федоренко Ф. И. “Секты, их вера и дела” М., 1965; Филимонов Э. Г. “Баптизм и гуманизм” М., 1965 など

(4) 分離派はニーコンの改革以前の古儀式に依拠する正教徒であるため、基本的には正教のジャンルに入るかと思われる。ソビエトの無神論哲学の第一人者であった Бонч-Бруевич もラスコーリニキはいわゆるセクトとはみなしていない。しかし、こうした分離派にも細分化が激しかったこともあってセクト的な要素もある。

元来、白海及び北氷洋に面する北部の地域、いわゆるパモーリエ地方⁽⁵⁾は分離派にとって重要な意味をもつところであった。初期の物理的抵抗運動⁽⁶⁾の場となったソロヴェツキー修道院は白海に浮ぶソロヴェツキー島にあった。この地方はもともと僧侶が少ないところでもあり、洗礼、聖餐などのサクラメントが行なわれなかったり、信徒が行なっていたといわれ、無僧派を生む土壌が形成されていたといえる。そして無僧派の有力グループであるパモーリエ派は、オネガ湖北のヴィグ河畔を中心に発展した⁽⁷⁾。以来無僧派の拠点が集中する地域となったが、革命前にはそれらの数も減少してしまったといわれる。現在は団体の数は減っているものの、アルハンゲリスク、ヴォーログダ、キーロフ（旧名ヴァトカ）⁽⁸⁾、カマ河畔のペルミ州、スカンジナビア半島根元のカレリア自治共和国及びコミ自治共和国等に分散している。コミ自治共和国のペチョラ川及びその支流地域では、現在も若干熱狂的傾向が強く、国家・社会に対抗的な立場をとっ

(5) 狭義には白海沿岸のケミ市からオネガ市までの地域、広義にはカレリア、北ドゥビナ地方（現在のアルハンゲリスク州の一部）、ヴァトカ地方、ペルミ地方、ボスポーニエ、ペロオーゼロ、ペチョーラ地方を含むオボネーリエから北ウラルにかけての地域をさす。いずれにせよ15—17世紀の呼称である。

(6) ソロヴェツキー修道院の抵抗運動は1668年から1674年までの8年間に及ぶものであった。この運動についてソビエト史学は、ラスコール運動のとらえ方とも関連することであるが、反封建的・反政府的闘争とみているが、筆者によれば基本的にはあくまでも宗教信仰上の抵抗であり、それが進展過程で諸々の反政府的不満分子などを吸収してゆき、形の上で反政府・反封建的な色彩をももったと思われる（参照 拙論「ラスコーリニキをめぐる若干の問題」中京大学教養論叢第16巻、第1号）。なおソロヴェツキー修道院の闘いについて最近写本と現代語訳が出ている。《Повесть о Соловецком восстании》— текст рукописи в современной транскрипции, Перевод на современный русский язык М. И. Автократовой—《Книга》1982

(7) ヴィグ河畔における分離派の動き・歴史については R. O. CRUMEY: The Old Believers & the World of Antichrist があり、1694年より1855年までのことが克明に記されている。

(8) 1780年まではフルィノフ、以後1934年まではヴァトカと呼ばれていた。ラスコールにとってはよく登場してくる地名である。現在ではヴァトカ河に古名を残している。

ているが、その他の地域では過去の厳しい掟から徐々に脱しつつある。

2. バルト海地域（ポーランド⁽⁹⁾ も含む）

ここは無僧派の有力グループであるパモーリエ派⁽¹⁰⁾、フェオドーシイ派⁽¹⁰⁾、フィリップ派⁽¹⁰⁾の信徒たちが迫害を逃がれて住みついたところである。しかし、この地域ものちにロシア帝国領に入るや⁽¹¹⁾再び迫害を受けるようになった。さらに1940年のソ連邦加盟後は第二次世界大戦時にドイツ軍の侵略を受けている。ポーランド、リトワニア、エストニア、ラトビアが独立国家を形成していた時には、これらの国々には20万人以上の信徒がいたといわれている。こうした経緯からしてこの地域には無僧派の重要拠点が多くあり、登録をしている団体⁽¹²⁾の大部分が集中している。この地域の信徒は白ロシア共和国、レニングラード州、プスコフ州の団体ともつながりをもってきた。特記すべきこととして、後に詳述するが、リトワニア共和国の首都ヴィリニウスには最高古儀式派会議 BCC が統一組織として存在し、全国の無僧派組織に影響を及ぼしている。また、ラトビア

(9) 現在も力をもっているフェオドーシイ派は、もともと17世紀末にパモーリエ派に属していたフェオドーシイ・ヴァシーリエフがポーランドに出て群れを形成したものである。その後各地に移り、モスクワで繁栄した。このようにポーランドはラスコールにとってかなり重要な役割を果たしたところである。

(10) これらのグループの発端、主張などについては、邦文献としては拙論「ラスコールニキをめぐる若干の問題」(前掲)、「ラスコールニキの内部分化(1)」(中京大学教養論叢20巻2号)があるのでそれらを参照されたい。ロシア語文献としては多数あるが、作家かつラスコール研究家であったメーリニコフの文学作品「山の上で」「森の中で」及びラスコールの直接研究「僧侶派の概要」(1864—66)、「分離派教徒の数」(1868)、「秘密の諸分派」(1868)等が興味深い。

(11) リトワニアは18世紀末のポーランド分割でロシアに併合された。エストニア、ラトビアは1710年ピョートル大帝のリヴォニア遠征の結果ロシア領に入った。

(12) 帝政ロシア時代にあっても、政府による登録要請に応じない分離派グループがあった。そのことを主張の特徴とするグループとしては、Аароновщина (アロン派：アロンとはモーセの兄で最初の大祭司、この派の創始者の渾名に由来)、Пастухово согласие (パスポート、金銭を持ち歩かなかった)、放浪派などがある。フィリップ派も元々は反対していたが後には認めるようになった。

共和国のリガにある分離派教会についても最近興味深いレポート⁽¹³⁾がある。

3, モルダビア共和国⁽¹⁴⁾, ウクライナ共和国

この地方には分離派は18世紀末から19世紀初めに住みつくようになり, 19世紀後半からは僧侶派が数においてまさるようになった。信徒は一般に分散・孤立して住んでいたようであり, 仕事としては園芸, 漁業が主なものである。僧侶派の固有の府主教座に基づくベラクリニツァ教会が生まれ

(13) ≪スプートニク≫1982年10月号にノーボスチ通信社ラトビア特派員アレクサンドル・エメリヤノフの『300年の反抗の終り, ロシア古儀式派史の新時代』と題するレポートがある。それによるとロシアから逃れてきた古儀式派の一部はリガにも住みつき, 1760年に教会堂が設立された(但し, 教会の外観をもたないもの)。1906年ようやく鐘楼が建造された。このパモーリエ派のグレベンシユーフスキー教会は分離派の教会の中でも最大級のもので, 6000人以上の収容力を有する。通常は250人程の集まりだが復活祭やクリスマスには満員になるという。この教会のメンバーは現在約2000人で大半は年配の人たちである。首長はラヴレンチ・ミハイロフ。次に, 現代の分離派の様子を示す2, 3のエピソードもレポートされているので紹介しておきたい。ある古儀式派信徒の葬儀に多数の一般市民が集まったという。それはその信徒が優秀な外科医(心臓外科)であったからだだが, 古儀式派でありながらも社会的に認められる活躍をしていることで, 過去の閉鎖性は崩れつつあると報じているのである。(但し, この信徒については“代々の信徒”と記されているだけで本人の信仰がどれ程のものであるかは不明。レポートの題からしても, ソビエトのラスコール観からしても格好の好材料であろう。とはいえ古儀式派の社会同化の一端であろう)。さらに教会から若者が正教会のレニングラード神学アカデミーに派遣されたとの記事がある。ここには正教会と古儀式派との和解の動きがみられるのだろうか。先代の総主教アレクシイは古儀式派を教会から呪逐しないように勧め, 破門を解いたといわれる。但し, モスクワ総主教出版部の“The Russian Orthodox Church” (1982 ≪Progress≫) によれば他のキリスト教諸派との関係の言及はあるものの, 分離派とのことについては触れられていない。もう一点, 同教会には古代ロシアの遺産(稀本, 写本等)が多く集められており, フォークロア関係者の注目の的となっているという。

(14) ベッサラビアの名も有するこの地方は古くスキタイ人なども住んでいたが, 2世紀にローマの属州となり, 次いでビザンツ時代以後は交通の要地であったためか, 各種民族の侵入するところとなった。14世紀からはトルコの支配を受け, 19世紀初の露土戦争の結果ロシア領となった。ソ連邦には1940年に加盟している。

てからは、これを支持してきた。ソ連邦への再併合後信徒（数万人いたといわれる）の生活は変化し、現在では軽工業が発達し、専門的農業が普及した。教育も進み、若者の教会・信仰離れが目立っているといわれるが、旧信仰の影響力はなお残っている。

モルダビア共和国の首都キシニョフにはベラクリニツァのモルダビア＝キシニョフ・オデッサ監督管区の拠点がある。キシニョフはチラースポリ⁽¹⁵⁾と並んで教会の活動が活発なところで、固有の“伝統”を守ろうとしている。一方、活動が衰退しているところもある（チェレネーシュティの町、スィルノフ村などでは、司祭不在などもあって礼拝が行なわれていない）。孤立して住んでいるところ（クニチャ村、スターラヤ・ドブルージャ村、エゴロフカ村など）では多少活発な動きがみられるという。

ウクライナのオデッサ州では、オデッサ、イズマイルの団体では活動が活発である（イズマイル区等の集落、ヴェリコミハイロフ区のヴェリコプロスキー村）。

ヴィンニツァ州では、ベラクリニツァの監督管区があって活発である。

概してウクライナ西部やモルダビアは、以上のように、僧侶派の中心地であるといえよう。

4. モスクワ、モスクワ州

モスクワには僧侶派、無僧派のそれぞれの中心があって現在に至っている。すなわちロゴーシュカ墓地⁽¹⁶⁾がその一つで、ベラクリニツァ教会大主教座、逃亡司祭派教会、エジノヴェーリエの教会がある。これは僧侶派の中心地である。このロゴーシュカ墓地はモスクワの東部に位置し、面積は12ヘクタール。1771年モスクワにペストが流行した際、ロゴーシュカ地

(15) モルダビア共和国領内のウクライナ共和国との境界付近ドニエストル河畔にあり、工業の中心地。1979年現在人口13,9万人（1929—40年にはモルダビア共和国の首都であった）。

(16) “墓地”としての機能からいえば、モスクワの大商人モロゾフ家、ソルダチョンコフ家等の人たちが葬られている。革命後は一般の人たちの墓地ともなって、第二次大戦の戦死者も葬られている。

区に住んでいた古儀式派信徒により設けられ、以後古儀式派の中心地となった。1790～92年にポクロフスキー寺院、1776年にニコラ教会、1804年聖母生誕教会、20世紀初めに鐘楼が建てられている。

一方、モスクワ北東部のプレオブラジェンスコエ⁽¹⁷⁾には無僧派の有力な群れフェオドーシイ派の拠点がある。ここも1771年のペスト流行の際に設けられた。その後修道院的共同体が形成され、分離派の中心地の一つとなった。1866年にはエジノヴェーリエの修道院が開設されている。20世紀初めまでは、主に古儀式派の商人や手工業者が葬られてきた。

この他モスクワには、バモーリエ派、フィリップ派の団体も残っている。またモスクワ州のエゴーリエフスク区、ノギナ区にも団体がある。

5. ブリャンスク州

モスクワ南西350キロのブリャンスクを中心にしたブリャンスク州には、スタロドゥービエ⁽¹⁸⁾系の分離派が現在も住んでいる。ノヴォズィプコ

(17) 1771年モスクワにペストが流行したとき、フェオドーシイ派の商人コヴィーリンが政府に申し出てプレオブラジェンスキー関の土地の提供を得た。そこに隔離所をつくり、次いで墓地を設けモスクワから逃げのびてくる人々を収容した。コヴィーリンはある者は養い、ある者は治療し、ある者は慰めた。そのため病人だけでなく不遇の者が集まってくるようになった。それらの者にはその不幸はニーコンの改革を受け入れた信仰の故だとして、改宗させたという。さらにコヴィーリンは共住施設、祈禱所、食堂などを建て、その長におさまるとともに、その施設を修道院と名づけた。そしてヴィグやヴァトカの修道院を訪れ、その規則などを参考にし1808年に規則書を作成した。こうして生まれたのが≪プレオブラジェンスコエ墓地≫と呼ばれるフェオドーシイ派の拠点である。ここに住まう者500～1,500人、信徒数3,000～10,000人に達した。その後、政府からの干渉を受ける中で、1866年にはその一部が公会堂との妥協に基づく僧侶派のエジノヴェーリエに譲り渡されたりした。それでもなおかなりの力を有し、基本財は養老院が1,200,000ルーブル、年間予算が4,000ルーブルに達したこともある。礼拝時には180人の唱歌隊が奉仕したという。

(18) ラスコール発生直後比較的早い時期に、分離派はモスクワから脱出したがその一つの流れとして南西部のロシア＝リトワニア国境付近へのものがあつた。ここにはアヴァクムの友人であつたクズィマがいた。そうした動きの中で中心的な地域となつたのが小ロシアのスタロドゥービエ軍事・行政区であつた。これは後の

フ⁽¹⁹⁾ 区には、ノヴォズィプコフ、モスクワ及び全ルーシ大主教管区がある。さらにベラクリニツァ教会のクリンツィー⁽²⁰⁾・ノヴォズィプコフ監督管区があるが、弱体化傾向にあるといわれる。

6, ヴォルガ地方

現在もほぼ全域にわたって団体が存在しているが、ゴーリキー、ヴォルゴグラード、クィビシェフ、サラトフに比較的多い。農村部は若者の都市への流出もあって、祈禱集会などには数十人の老人が集まっているにすぎないようである。

7, その他の地方

(1)中央アジア北部, シベリア南部

この地域はツァーリの行政措置により強制移住させられた信徒の住みついたところであり、西カザフスタン、アラル海水域のカラカルパク⁽²¹⁾にウラル・コサック系の信徒の子孫がおり、カザフスタン北東山岳部、アルタイ地方にも分離派の群れが生活している。

(2)ザバイカル

18世紀中期、ヴァトカ、スタロドゥービエから移された信徒たちが住みつき、一時は4万人以上いたといわれる。

(3)極東地域

東進が進んでこの地域にまで及び、以来その子孫が細々と信仰を受け継いでいる。

(4)シベリア

19世紀になってチェルニゴフ県、現在はブリャンスク州の一部となっている。このようにスタロドゥービエは初期ラスコーリニキの歴史において重要な役割を果たしたところである。

(19) ロシア共和国西部、ブリャンスク州南西部の町で人口3,4万('70)。鉄道の要地。食品・機械工業が行われている。

(20) ブリャンスク州西部の都市で州都ブリャンスクの南西184kmに位置する。現在では繊維機械、皮革、製靴、縫製工業が発達している。

(21) ウズベク共和国西部の自治共和国（アラル海南岸、アムダリア下流域を占める）。

とめることができよう。ソ連邦内に限ってのことだが、現在も意義をもっている分離派の拠点は、無僧派がバルト海沿岸地方及び北部地方、僧侶派がモルダヴィア、ウクライナなど南西部にあり、首都モスクワには両者のグループが健在であるということになる。

しかし、革命後の政策のためもあるが、都市、農村とも世俗化が進み、孤立した独立の生活をやめているとソビエトの調査結果は物語っている。孤立して旧来の生活を保っているのは、北部のコミ自治共和国、トゥヴァ自治共和国、クラスノヤルスク地方、チュメニ州他のタイガの中にある小村である。また若者が都市へ出るにあたり、その属する群れのグループがなかったりしてそれを契機に信仰から離れていくことがあるようである。加えて、分離派には統一的な組織が十分でないことも不利な状況をつくりだしているといえよう。

2. 分離派各組織の現状

信徒の数を正確につかむことは不可能に近いが、1912年1月1日の全国人口調査資料によると分離派は2,206,621人であるという。登録されている団体は1,268(589,076人)で、司祭・教師は1,196人となっている。教会の数は630、祈禱所は3,161、分離派独特の隠舎、僧院は73である。登録を拒否する信徒も多かったため、これらの数字は現実をそのまま表わしているわけではなく、革命直前の信徒総数は500～1,000万人であったろうと推定されている⁽²²⁾。

僧侶派は995,375人(先の2,206,621人のうち)で、ベラクリニツァ教会に属するものが大多数を占め787,983人(20の監督管区、うち3つは国外)となっている。逃亡司祭派は206,950人であるが、ベラクリニツァ派との対立で減少していったようである(後述する)。

一方無僧派は1,211,246人で数の上では僧侶派を上まわっていたが、小さなグループに分れていたため、全体的な力はそれほど大きくなかった。

(22) 《Современное старообрядчество》の著者 В. Ф. Миловидов によれば、ボンチ＝ブルエヴィチの推定(2,000～2,500万人)は多すぎるという。

最大のグループはパモーリエ派である。

さて、革命の波を浴びたこれら分離派各派が現在どのような状況におかれているかということに移りたい。

僧侶派

1, ベラクリニツァ教会派

公教会から分離した状態では僧侶の“生産”ができないことから、分離派の主張に理解を示す正教高位聖職者を求め、主教の叙聖を受けようとする動きのなかで、1846年オーストリア・ハンガリー帝国内のベーラヤ・クリニツァ（プコヴィナ⁽²³⁾）で遂に成功をみたのが始まりである。やがてモスクワのロゴーシュカ墓地に教会が生まれてその中心地が形成された。こうしてモスクワ及び全ルーシ古儀式派大主教管区が成立し今日に至っている。

革命後の歩みをざっと紹介すると、内戦時代は当時の府主教メレーチイなどは反革命の立場をとったため、当然弾圧の対象となり30年代の後半には崩壊の危機に陥ったという。1941年ようやく大主教⁽²⁴⁾イリーナフのもとに活動を再開し、52年以降大主教にフラヴィアン、ヨシフ、ニコジムが選ばれ現在に至っている。一時公教会に対する関係において忠誠と妥協を宣した1862年の《回状》をめぐって、それを認める賛成派（回状派）と反対派に分れ論争が生じたが、賛成派が優勢を占めた（但し、この問題については現在ではほとんど忘れられており、反対派もごく一部が残っているにすぎない）。こうして、この派は最も安定した組織となっている。ソ連邦ヨーロッパ部にはモスクワ、ドン・カフカース、ヴィンニツァ、キーエフ・オデッサ、キシニョフ、クリンツィー・ノヴォズィプコフ監督管区がある。

(23) ウクライナ共和国西部チェルノフツィー州とルーマニアのアチャバ州を含む歴史的地名でオーストリア領となったり、トルコに属したりしたが、この時期は再びオーストリア領であった（1849年まで）。1945年以降は北部がソ連邦、南部がルーマニアに属している。ブーク（ブナ）が繁茂していたことからこの名がついたといわれる。

(24) ここでいう大主教とは、大主教管区協議会の首長であるが、この会議では司祭の叙任・退職、年金問題、家庭・結婚の問題などが協議される。その際には古儀式派の厳しい戒律が作用する。

キシニョフには大主教がいるが、全体としてはなお主教不足或いは不在の傾向がみられ、信徒の数も現状維持もしくは減少といったところである。

モスクワの拠点は先に紹介したロゴーシュカ墓地で、大主教管区協議会があり、《古儀式派教会暦》を出版している。この他ではモルダヴィア、チェルノフツィー（ウクライナ）、ヴィンニツァ、オデッサ州、ゴーリキー、ヴォルゴグラード、トムスク州、セヴァストープリ地方が目立っている。モスクワ、ヴォルガ地方では団体の数は比較的安定している。

ベラクリニツァ教会と正教会の違いをあげてみると、礼拝時間が正教会より長いこと、祈禱はミサ出席者全員が行ない、レストーフカと呼ばれる独特の革の珠数で数えること、信徒は定められた数だけ熱心に **земные поклоны**⁽²⁵⁾ をすること、正教会よりも平信徒に大きな役割が与えられていること、イコンはニーコン以前の古い描き（書き）方のもののみが認められていることなどであるが、全体的にはもはや正教会との間にそれほどの差異はないようである。

2. 逃亡司祭派

このグループは、ベラクリニツァ教会を生み出した府主教アンブローシイはカトリック式の滴礼により受洗したもので、正教本来の浸礼（3回）によっていないとしてこれを認めていない。

このグループの現代における動きとしては、10月革命後生まれたあの有名な正教会内部の革命擁護派《活ける教会》⁽²⁶⁾ から1923年にサラトフの大主教ニコライが移ってきたこと、さらにスヴェルドロフスクの正教主教

(25) 頭を地面につけるように礼拝するのだが、こうした礼拝（お辞儀）には、2種類ある。大礼拝と小礼拝である。小礼拝は通常行うもので手を地面までおろすこともある。旧約のアブラハム、モーセに由来するという。現在では福音書朗読時、聖饗の供物を供物台から宝座に移す時、主教又は司祭から祝福を受ける時に用いられる。大礼拝が **земной поклон** にあたる。これは大精進礼拝の時に行なわれる。

(26) ロシア革命による社会主義国家の成立は当然ロシア正教会にとっては大きなショックであった。革命前夜長らく廃止されていた総主教を復活させて防衛体制をとったが、革命政権による初期の教会弾圧は大変激しいものであった。こうした直接的弾圧がある一方、正教会内部にも《活ける教会》というグループが生み出

スチュファンの加入もあって従来の姿と様相を異にしたことがある。すなわち、2人主教がそろったことにより、新しい主教の叙聖が可能となり本来正教会から逃れて古儀式派に賛同する司祭によって信仰生活を守ってきた《逃亡司祭派》にも、司祭叙聖制度が生まれたわけであり、その意味においては元の姿、元の原則を失ってしまったのである。

この派の拠点はこうしてサラートフに移ったが、他にはモスクワ、クイビシエフ、ノヴォズィプコフにある。1969年から主長には大主教パーヴェルが就いている。信徒の分布としては、クラスノダールスク地方、ブリヤンスク、クールスク、クイビシエフ、モスクワ州、国外のブルガリア、ルーマニアに及んでいる。

ベラクリニツァ教会とはそれほどの差異はないが、社会的にみればこのグループの方が熱狂的であるといわれる。

3. エジノヴェーリエ

エジノヴェーリエとはそもそも僧侶派と正教会との妥協の産物⁽²⁷⁾と

され革命擁護にまわった。この指導者のある者はレーニンをキリストの1人であると断じてはばからなかったといわれる。このグループは革命政権の側からの工作の一つであったともいわれている。一方、正教会も何らかの形で政府と一定の妥協をせねばならなかったが、それら一切の妥協を廃する《真正正教会》なるグループが生まれ地下活動に入ったこともよく知られている。

- (27) 古儀式派と正教会との条件つき統一をはかろうとするものであるが、この考え方はずっと以前からあった。これを現実化しようと最初におこなったのはニキフォール・フェオートキイであった。ニキフォールが大主教のときにズメンカ村に住む古儀式派信徒が正教会への合流の願いをもってきた。ニキフォールはこれを認め、その村に司祭を派遣した。そしてまもなくエジノヴェーリエの会堂が建てられた。当初これはシノードにより理解されなかったが、ニキフォールらの努力もあって徐々に認められ、遂に1800年公式に認められるに至った。エジノヴェーリエという名称はモスクワ府主教プラトンによって与えられた。ラスコーリニキと公教会との合一の基礎は次のようなものであった。(1)エジノヴェーリエに入る者はラスコーリに向けられていた呪詛から逃れられる(2)信徒には主教から司祭が与えられるが、その司祭の指示に従うこと(3)結婚式は結婚しようとする者の同意があれば行なわれ得る(4)司祭は正教会の sacrament を受け入れることなどであった。モスクワのプレオブラジェンスコエ墓地には、そこがフェオドーシイ派の拠点であったものの、1854年に浸透した。

いわれ、帝政時代にも正教会から司祭を得ていた。そしてその司祭は相応の主教の支配下にあったといわれる。1918年副主教が与えられるに至ったが、こうした中間的な性格のためか、革命後は衰退気味で一部は純粋な古儀式派への復帰、一部は完全に正教会に合流するといったケースが多くみられるようである。

以上が僧侶派各派の現状の一端であるが、まとめると次のようになる。かつての逃亡司祭派の衰退、スラヴ・ペロヴォージェ教会⁽²⁸⁾、ベラクリニツァ及びエジノヴェーリエ内部の《回状》反対派などいくつかのグループの消滅により、ベラクリニツァ教会派の活躍が目立っているというものである。

無僧派

無僧派については、その発生以来無数のグループに別れていった⁽²⁹⁾が現代においてもなお勢力を保っているのはパモーリエ派、フェオドーシイ派、フィリップ派、放浪派、キリスト派、小礼拝堂派などである。このうちパモーリエ派とフェオドーシイ派が比較的大きな組織をもつほかは、無僧派各派は一般に小グループであり、組織の数としては僧侶派にまさっているものの影響力という点では当然のことながら劣っている。以下に無僧派各派の最近の状態を紹介する。

1. パモーリエ派と BCC

パモーリエ派とはその名称に示される通りロシア北部のパモーリエ地方に生まれたグループであるが、現在の中心地は先にもみたようにバルト諸国となっている。このバルト諸国は元来フェオドーシイ派が迫害を逃れて集まってきていたところで、資本主義の発展とともに優勢となっていた

(28) 19世紀末に《ペロヴォージェ僧職制》大主教アルカージイにより生まれたものであるが、このグループの成立については18、19世紀に広がった次のような伝説がかかわっている。つまり、総主教を首長とする正教会は極東の《ペロヴォージェ》に存在するというものである。《ペロヴォージェ》とは既に17世紀から流布していた、日本或いはインドにあるとされた自由の国についての伝説である。

(29) 参照、前掲拙稿「ラスコーリニキの内部分化(1)」

（19世紀末においては、この地方の無僧派といえはフェオドーシ派とされていたのである）が、地方的な特色が鮮明になり、他の同グループ組織より隠健な主張をもつようになった。それにつれてパモーリエ派に接近し、徐々にパモーリエ派の浸透を許し、ついにはパモーリエ派が優勢となったのである。フェオドーシ派に比べるとパモーリエ派の方が無僧派古儀式派の各種主張からすれば隠健であり、戒律、規律などもゆるやかであったからであろう。

パモーリエ派は、正教の7つのサクラメント（機密）⁽³⁰⁾のうち洗礼、懺悔（痛悔）を認め、この他に結婚の儀式を行なっている。又、追善⁽³¹⁾の儀式ももっている。聖餐（聖体）についてはこれを霊的にのみ受けとり、聖餐の儀式はない。全体として無僧派の中では穏健な立場にあり、無僧派と僧侶派の中間的な位置にあると考えられる。それは無僧派 беспоповщина にもかかわらず、リトワニアやラトビアでは поп（司祭）の代わりに立てられている наставник⁽³²⁾（教師）が поп と名のられていることにもあらわれている。

さて、無僧派にはその基本的性格によって統一組織がなかったが、統一への動きが10月革命後みられるようになった⁽³³⁾。そのことをパモー

(30) 正教の信經ニケア信經第十条に基づき、洗礼、傳膏、聖体、痛悔、神品、婚配、聖傳の七つの機密がある。

(31) 正教には先に召されたものを記念して祈る法要に似たものがある。その際には故人の好物であったものを家族が作って食べつつ故人を偲ぶということがある。これを共食という。その一つは蜂蜜を加えた蜜飯（米や麦）である。教会暦ではキリスト降誕祭前夜からキリスト洗礼祭までのクリスマス週間に行われる。追善の祈りについては＜永久追善＞（教会にある名簿によって行うもの）と個々の人の要望で行うもの（特別の過去張がある）がある。

(32) 無僧派ではその名が示す通り поп（僧、司祭）を認めないで信仰生活を守っているのであるが、信徒の指導、教育にあたる者も一方では必要で、教師と呼ばれる司祭格のものが設けられたのである。パモーリエ派には ВСС 公認の наставник がいる。

(33) 筆者はこのことの背景（政治的）などについてはここでは問わないこととして事実をそのまま紹介することにとどめたい。

リエ派との関連でみてみたい。

統一への動きはポーランドやリトワニアでおこった。一方ラトビア、エストニアでもパモーリエ派によるフェオドーシィ派の吸収過程が進んでいた。国外でこのような動きが生まれていったのは興味深いことであるが、1925年ポーランドに Восточная старообрядческая церковь（東方古儀式派教会、但し僧職制は有しない）が生まれ、パモーリエ派、フェオドーシィ派、フィリップ派といった無僧派の主要グループの統合がおこなわれたのである。そして第二次大戦の影響でポーランドの分離派の大部分はリトワニアへ移り、統一運動はバルト地方で進んでいくことになったのである。こうして戦後リトワニア共和国に無僧派の最初の統一教会が生まれ、徐々に全国に及んでいった。ビリニュースに無僧派会議が設立され、モスクワ、リガ、ダウガフピルス、白ロシアの代表も加わっていった。ここではパモーリエ派の教えに基づいて信仰、カノンの問題が解決され、パモーリエ派にとっては全ソビエトの最高権威となった。こうして生まれたのが最高古儀式派会議 ВСС (Высший Старообрядческий Совет) である。

1966年はラスコール300年目にあたり、ビリニュースにおいて ВСС の拡大記念大会が開かれた。これにはラトビア、エストニア、白ロシア、ウクライナ、ロシア連邦共和国（モスクワ、レニングラード、バルナウル）が参加し、И.И. エゴーロフが「過去及び現代の古儀式派」と題する報告を行なっている。この大会により、無僧派におけるバルト諸国の役割が強調され（モスクワの地盤は低下）、ВСС の指導的役割が確認されたほか、古儀式派の統一、強化がはかられた。

1968年には ВСС 議長 И.И. ニキーチンがエストニア、キルギスに向かい現地の指導者と会談している。このように ВСС はリトワニア共和国が中心となってその周辺諸国及び全国に拡がった無僧派の組織であるが、1970年前後よりこの地域で顕著になった危機⁽³⁴⁾（農村部の教師不足、都市への若者の流出、無神論教育の影響などによる）がこうした動きに影響

(34) ビリニュース、カウナス、フライペドゥでは、団体の数は維持されたのであるが、質的にみれば危機的な状況を迎えたというものである。

を与えているようである。こうしてまずパモーリエ派、フェオドーシィ派、フィリップ派が、そして次にキリスト派、放浪派、小礼拝堂派なども統一の対象とされていった（但し、パモーリエ派の主導によるため、パモーリエ派と他のグループとの関係、特に他派からパモーリエ派に移る場合の対応については区別があった。即ちフィリップ派、フェオオドーシィ派から移ってくる場合は再洗礼の必要がなかったが、他のグループからの場合は再洗礼が勧められたのである）。

1974年7月14日ビリニウスでもたれたパモーリエ派の集まりで BCC 議長 И. И. エゴーロフは「現代におけるパモーリエ派教会の活動とはたらき」と題して講演し、教会組織の統一を強調して次のように述べたといわれる。「教会が設立された時キリストにより教会に与えられた祝福と権威は、強制的に僧職者を奪われても、古き正教の古儀式派教会をすてさらなかった」と。

尚、現在 BCC には350以上の無僧派の団体が入っている他、ポーランド、ルーマニア、アメリカ、フランス、ブラジル、アルゼンチンの団体も加っている。そして霊的な問題のほか、組織上の問題の解決にあたり、古儀式派の教会暦の出版、教師の認職などがその働きの主なものである。

にもかかわらず、なお次のような危機感をもっている。エゴーロフによれば、若者が離れていくこと、信仰心の低下、サクラメントの不履行、十字架携行の拒否、礼拝中の落着きのなさなどである。従って、柔軟な態度、姿勢をとらざるをえなくなっているようで、旧来の《古き信仰》に基づく厳格な要素は減退しているといえよう。と同時に、教師陣の充実をはかるべく、任用の際の儀式を重視したり、証明を出したりする方策もとられている。

以上 BCC という無僧派のいわばまとめ役的機関について紹介してきたが、なお2, 3コメントをつけ加えておくと、BCC の教会行政上の機能はリトワニア共和国内に限定される点、にもかかわらず無僧派の団体の多くが《入るものは拒まず》の原則のもとに霊的指導をうけている点である。

2. フェオドーシィ派

全体として過去の勢いは減退している。かつてはモスクワの《プレオブ

ラジェンスコエ墓地」が繁栄し、全フェオードシィ派がその権威を認めていたが、その後パモール派への合流が進み、現在もその低下傾向が続いている。原因はパモーリエ派よりも厳格⁽³⁵⁾で、世間ばなれしているその基本的性格によるところが多いように思われる。つまり、結婚は否定され、既婚者は唱歌隊に入れないばかりか、会堂で祈ることさえも禁じられている。教師は未婚の者に限られる。さらに、一般市場で買った食品は必ず祈りによって浄めなければならないこと、外部の人との交際が禁止されていることもある。このほかパモーリエ派との相違を1点あげておくとИНЦИ (Исус⁽³⁶⁾ Назарянин Царь Иудей) (ユダヤの王ナザレ人イエス) と刻まれた十字架をもつこと⁽³⁷⁾にある。

3. フィリップ派

このグループは、フェオードシィ派よりもさらに熱狂的⁽³⁸⁾、生活習

(35) この派の教説は基本的には無僧派の教えによっているが、次のような点に特徴がある。アンチ・キリスト論との関連ではツァーリのための祈りを当初は拒否していた（但し、1848年にこれを受け容れた）。結婚の問題では厳しく、未婚の生活を要求した。1883年の会議でも未婚の生活を求め、結婚でも司祭によらないものは（外部からの転入者の場合か）異端とした。こうした外側からの結婚の否定は社会的にみればしばしば淫乱を生む要素となった。事実多くの不道德を指摘した記録が残っているという。

(36) イエスの綴り方はニーコンの改革をめぐる公教会と古儀式派との対立点の一つであった。古儀式派は Исус と綴り、正教会では Иисус と綴られたのである。

(37) パモーリエ派の場合は ЦСИХСВ (Царь Славы Исус Христос Сын Божий 栄光の王、神の子なるイエス・キリスト) となっている。

(38) ≪火の洗礼≫で有名である。政府・公教会による分離派弾圧が猛烈な勢いで進められていたころ、パモーリエ派出身のフィリップはパモーリエ派の妥協を認めず別れ出て新しいグループを形成したのであるが、政府の追手が迫ってきた時フィリップは70人の支持者とともに僧房にこもり自ら火をつけたのである（1743年）。その後もこれに同調する形で次の指導者チェレンチャー某も1747年98人の信奉者とともに焼身自殺をしている。このようにこのグループにあっては自殺は信仰を守るための苦悩・試練として甘受され、殊に火に身を投じることは≪火の洗礼≫（聖書では火は聖霊＝ペンテコステの出来事参照＝をも意味するところから聖霊によるバプテスマを文字通り火に身を委ねることとして受けとったのであろうか）として考えられたのである。

慣も厳格であり、《крепкие христиане》とも呼ばれている。現在はかなり少なくなり、ヨーロッパ部分の北部諸州に居住している。パモーリエ派、フェオドーシイ派との合同がみられるケースが多くなっているといわれる。

4. その他の小グループ

a. キリスト派⁽³⁹⁾

あまりよく分っていないが、ゴーリキー州、サラトフ州、ウラジーミル州、アストラハン州、モスクワ州、レニングラード州、タタール自治共和国などに残っている。この派は《洗礼》をめぐってさらに分化が進み、種々の小派がある。洗礼を正教会で行なう“глухая нетовщина⁽⁴⁰⁾”，自分で洗礼を行なう“自主洗礼派”⁽⁴¹⁾及びその変種で産婆が子供に洗礼を施す“産婆派”⁽⁴²⁾などである。

また“孔派”⁽⁴³⁾はイコンに関して独特の考え方をもっており、イコン崇敬を原則としては否定しないものの、新旧を問わずイコンの前での祈りが

(39) 17世紀末にケルジェーニェツの森に生まれた無僧派グループで創設者がコズマであったためコズマ派 *козминщина* ともいわれる。主な主張は、今や反キリストの時に入っているため至福は天に移されてしまったと考え、救いは神のみが知り給うこと、イエス・キリスト (Спас) により頼むしかないとし、一切の制度（司祭制、サクラメント）については期待しないとした。群れの分裂の原因となった洗礼については一般信徒による洗礼を否定した。

(40) 名称の由来は、懺悔を長老の前でではなくイコンの前で行うのと同時に朝禱、晩禱などの時にする祈りは無言で行ったところにあるといわれる。洗礼とならび結婚の問題についても独自の主張をもっていた。つまり、結婚は正教会を異端視しながら、正教会に出向いて行うという奇妙な立場をとっていた。

(41) 洗礼、結婚の問題についてキリスト派の考え方をさらに徹底させたグループで、反キリストの時代にいるという認識からあらゆる儀式を否定したのである。従って自分自身で個人的に洗礼、結婚を行うのである。ちなみに創設者は農夫のロマン・ダニーロヴェツである。ロシア語名は *самокрещенцы*。

(42) 自主洗礼派の変形である。ロシア語名は *Бабушкино согласие*。

(43) 自主洗礼派から別れ出たものでイコンについて独特の考え方をもつほかに、“光は東方より”との信仰に基づき家の東側に小さな孔をあけて、孔から祈りを捧げた。

否定されている⁽⁴⁴⁾。このグループはウラル、アルタイに少数が生き残ってきた。

b. 小礼拝堂派

これは逃亡司祭派から出て無僧派に変わったもので、уставщик と呼ばれる唱歌隊長により宗教的機能が果たされ、教会堂ではなく、小礼拝堂で行なわれるのである。洗礼、懺悔、聖餐を認めている。スベルドロフスク州、オレンブルク州、トゥバー自治共和国などにあって革命後も社会との接触を拒絶してきた。特にトゥバー自治共和国ではソビエト時代に入っても集団化の時期、第二次大戦時に狂信的な面をみせたといわれている。

c. 放浪派

最も熱狂的⁽⁴⁵⁾であり、世俗社会との接触を極端に拒絶してきた。革命前の信徒の数を示すものとして《放浪する真正正教キリスト教徒》は4,385人であるという数字が残っている⁽⁴⁶⁾。世俗社会にあって群れの個々の主張を守って生活する者⁽⁴⁷⁾になるとさらに多いと推定されている、ヤロスラフ州、イワノフ州、ゴーリキー州、シベリアのトムスク州、カザフスタン、ウラルなどが主な居住地域である。20年代には活発な宣教活動を行なったようで、その結果20～30年代にはペチョラ川上、下流地域に急速に広まったといわれる。派内最大のグループはヒエラルヒーを認めるニ

(44) ニーコンの改革以前のイコンは異端者に汚されているとして否定し、ニーコン以降の新しいイコンも僧職制のない時代であるから聖化されていないとして礼拝の対象としないのである。

(45) ピョートル大帝を反キリストとみなし、この反キリストとの戦いを《身を隠して逃げる》ことで挑んでいくことが唯一残された道と考えた。従って人口調査への非協力、税の支払い、パスポートの持参などを拒否して社会との接触を避けた。群れに入る条件も厳しく、いかなる場合も再洗礼が必要とされたほか、実際に隠れる生活に入るか、さもなくば放浪生活に出る誓いをするかが要求された。放浪生活では、階段や物置きの下の穴、壁のうしろ、二重になった屋根の下の隠れ家を利用した。この派から金銭を使用することを否定するグループが出ている。

(46) この数の出所は不明。

(47) странноприимцы とか христоролюбцы と呼ばれる。

キータ・セミョーノフ支持派⁽⁴⁸⁾（статейники, иерархиты ともいう）である。第二次大戦時は、《世の終り》、《最後の時》と訴えて、信徒たちにタイガへ逃げて魂の救いを求めるようアピールした。43～47年頃にはオレンブルグ州、ヤロスラフ州、チェリャビンスク州、ペルミ州、ヴォーログダ州、スヴェルドロフスク州、トムスク州他に地下グループがあったとされている。1964年にはカザフスタン、ウズベキスタンにも組織があったことが明らかにされている。

特異なグループとしては、トムスク州のトムスク・チェリムタイガ地区に住む странники-пустынники なる地方組織で、1965年の調査によると金銭の使用を認めるか否かをめぐって2派に別れている⁽⁴⁹⁾。いずれにせよ、周辺住民に一定の影響を及ぼし《世捨て》の状態に入るよう勧めていたようで、秘密の隠れ家 потайной дом があった。但し、これにも2種類あり、一切の燈りもない тайный ночлег と一部の生活必需品だけはある тайный склад がある。さらにやや隠健なグループがあった。つまり、《世捨て人》として人里離れたタイガの奥地などに住んではいるが“開かれた生活”をし、自給自足及び一部の作物の販売で生計をたてていたものである。

こうした放浪派も最近では変化がみられ、かなり軟化してきているようである。

以上が無僧派にみられる最近の動向である。

3. 現代の古儀式派調査報告書

以下に В. Ф. Миловидов も参考にして、ソ連で戦後行なわれた各種調査に関する文献を列挙しておく。

(48) 19世紀の中葉に結婚生活を支持する結婚放浪派とともいうグループとともに現われたものである。教師＝キータ・セミョーノフの статья (пункты) を支持する者たちで статейники という名ももっているのである。

(49) 一つは иерархиты (金銭使用派＝多数派) で、もう一つは金銭には反キリストが印刻されているとしてそれを否定する безденежники である。

本格的調査・研究

1961年 Институт истории АН СССР 宗教・無神論史部会の調査 Рязан 州 調査
Институт этнографии АН СССР も Забайкалье, Горьковская область 他
を調査

社会学的方法を用いた調査

Белорусская ССР, Эстонская ССР, Коми АССР,
Бурятская АССР, Севастопольский край 他

北部地区についての調査・研究

В. И. Малышев: 各種考古学調査

Л. П. Лащук: Старообрядчество на территории Коми АССР
Коми АССР 関係 —《Вопросы атеистической пропаганды》—
Сыктывкар, 1961

Ю. В. Гагарин: Распад печорского старообрядчества
Коми АССР の —《Социалистические преобразования в Коми
Печора の実態調査 АССР》— вып. 9, Сыктывкар, 1965
Старообрядцы Сыктывкар, 1973

И. В. Третьякова: К проблеме религиозного синкретизма в старооб-
МГУ 人類学講座に рядчестве
よる Коми АССР —《Проблемы истории СССР》— М., 1973
Усть-Цилемский
район の調査

北西部地区関係（バルト諸国） 全体的に実態調査はほぼ終わっている

А. А. Подмазов: Старообрядчество в Латвии Рига, 1970
Латвия Даугавпилс 第二版 1973 Церковь без священства
市及び農村部の調査 Латвияの古儀式派の全様とバルト諸国に住みついた事情を紹介

Е. Рихтер: Опыт исследования религиозности и русского
Эстония населения Причудья
Чудское озеро —《Известия АН Эстонской ССР》— т. 18
地区の研究 Общественные науки, 1969, No. 1

Причины существования и пути преодоления религиозных пережитков
(白ロシア調査) Минск, 1965

Забайкалье 全体的にかなり進んでいる

Л. Е. Элиасов: Старообрядчество, его пережитки
—《О некоторых религиозных культах и их
сущности》— Улан-Удэ, 1961

- Д. М. Коган: О преодолении религиозных пережитков у старообрядчества
—《Вопросы истории религии и атеизма》—
вып. XII, М., 1964
- Ф. Ф. Болонов: Об изменениях в быту и культуре русского (семейского) населения Бурятии
—《Этнографический сборник》— вып. 5, Улан-Удэ, 1969
Календарные обычаи и обряды семейских
Улан-Удэ, 1975
- Н. Е. Осипов: Семейские на Чикое
—《Проблема краеведения》— вып. 1, Чита, 1966
- В. П. Мотицкий: Современное старообрядчество Забайкалья
—《Вопросы преодоления пережитков ламаизма, шаманизма и старообрядчества》—
Улан-Удэ, 1971
Старообрядчество Забайкалья, Улан-Удэ, 1976
- ヨーロッパ部 中央部・南部地区関係, ヴォルガ流域, ウラル, ウクライナ, モルダヴィア関係……………比較的おこなわれている
- И. А. Кремлева: Отмирание старообрядчества в завожской деревне
ザヴォールジエの実態報告 —《Советская этнография》—
1974, No. 6, ст. 87-97
- Ю. М. Ивонин: Старообрядцы и старообрядчество в Удмуртии
Ижевск, 1973
- А. К. Рабчевская: Формирование атеистического мировоззрения казаков-некрасовцев под воздействием советской культуры —《Сборник трудов Московского государственного института культуры》— вып. 23, М., 1973
- その他の地域
- А. Долотов: Церковь и сектантство в Сибири
Новосибирск, 1930
- В. Ф. Миловидов: Распад старообрядчества в Рязанской области
—《Вопросы истории религии и атеизма》— вып. XI, М., 1963
- 分離派の現代の状態を全体的に研究
- А. Е. Катунский: Старообрядчество М., 1972
- В. Ф. Миловидов: Старообрядчество в прошлом и настоящем.
М., 1969
- その他 (сектантство 研究, атеизм との関連での研究等)

- А. И. Клибанов: Сектантство в прошлом и настоящем М., 1973
- Ф. Федоренко: Секты, их вера и дела М., 1965
- В. Д. Бонч-Бруевич: Избранные атеистические произведения М., 1973
- В. Г. Карцов: Религиозный раскол как форма антифеодального протеста в истории России Спецкурс. ч. 1-2 Калинин, 1971
- Н. М. Никольский: История русской церкви М., 1931
- П. Г. Рындзюнский: Старообрядческая организация в условиях развития промышленного капитализма
—«Вопросы истории религии и атеизма»— вып. I, М., 1950
- А. К. Рабчевская: Трансформация духовного облика старообрядцев под воздействием советского образа жизни М., 1973

Старообрядческий церковный календарь на год